

11 和歌山の鬼瓦

丹野 拓

A はじめに

和歌山県は畿内にあたる大阪府の南、奈良県の南西にあり、紀伊山地の北端を西流する紀の川沿いと、太平洋沿岸に小規模な平野部が所在する。三重県南部の東紀州地域を除く旧紀伊国全域が和歌山県となっており、基本的には、ほぼ旧紀伊国＝和歌山県と認識できる（第1図）。

紀伊地域と畿内の境界は、飛鳥・白鳳期の段階では紀の川中流域の兄山（背山）にあり、大宝律令制定時には紀ノ川上流域の真土山に移動している。伊都郡は飛鳥・白鳳期には畿内、天平期以降は畿外の紀伊国に属しており、注意が必要である。

飛鳥・白鳳期の古代寺院は紀北の紀の川流域に多く、北東部の伊都郡に4か寺、那賀郡に4か寺、北西部の海草郡（旧名草郡・海部郡）に4～5寺が所在する。海岸沿いを南に向かって有田（旧安諦・在田）郡と日高郡に1～2か寺、西牟婁・東牟婁郡（旧牟婁郡）に1か寺が知られている。天平期・平安期にも各地に寺院が創建されるが、伊都郡の高野山壇上伽藍、那賀郡の紀伊国分寺・粉河寺が有名である。

古代の鬼瓦は、岩出市（那賀郡域）の西国分廃寺と伊都郡かつらぎ町の佐野廃寺、紀の川市（那賀郡域）の紀伊国分寺で出土が報告されている。

B 飛鳥・白鳳期創建寺院の鬼瓦

i 西国分廃寺の鬼瓦（第2図）

西国分廃寺は岩出市西国分に所在する飛鳥・白鳳期創建の古代寺院跡である。

和歌山県教育委員会が昭和50年から53年にかけて4度にわたる発掘調査を行い（藤井1979）、那賀郡の中心的な寺と考えられている。東800mにある紀伊国分寺との対比から、創建後に紀伊国分尼寺に変更された可能性も考えられている寺院である。

寺院は紀の川の河岸段丘の南端に位置する。発掘調査では多数の瓦が出土したが、塔跡以外に伽藍を構成する建物跡は確認されなかった。塔跡を除くと塔跡の北東に設定したJ区とK区で軒瓦が集中して出土しており、これらは塔の北側にあった金堂の瓦と考えられている。鬼瓦（鬼板）片はこのJ区から出土しており、鳴尾片もJ区から北側のL区にかけて3片出土している。

1の鬼瓦は「菱形文鬼板」として報告された資料で、残存長は縦約22cm、横約16cm、

厚さは 20 ~ 25mm である。表面に深い溝を斜めに交差させて、一辺 25mm の菱形を浮彫りにした斜格子の上面に一つ置きに縦方向の三本一組の沈線を施している。側面はヘラ切りによりカーブしており、「高さ 30cm ほどの鬼板の一部」と考えられている。焼成はややあまい須恵質で、黄灰色を呈し、胎土にはほとんど砂粒を含んでいない。坂田寺式軒丸瓦を創建軒瓦とする寺院の金堂所用瓦と考えられているものであることから、7世紀中頃以降の製品と考えられる。

ii 佐野寺跡の鬼瓦（第3図）

佐野寺跡（佐野廃寺）は伊都郡かつらぎ町佐野に所在する白鳳期創建の寺院跡である。周辺には「塔ノ壇」の小字が残り、塔の礎石とみられる大石や古瓦の出土が知られていた。『日本国現報善惡靈異記』に登場する紀伊国伊刀郡桑原の狭野寺は、この寺院であると考えられている。

昭和 50 年度以降、和歌山県による緊急確認調査とかつらぎ町による町道整備に伴う発掘調査が行われ（藤井 2016）、伽藍や寺域、また重複する弥生時代の集落遺跡である佐野遺跡の確認が進められてきた。これまでに金堂と塔、講堂、六角堂などが検出されている。

1 は鬼瓦片として報告されている資料で、円形の割り込みのある破片である。割り込み上部より 3.5 ~ 4 cm の間に釘孔があり、釘孔より上部はやや反りをもつ。須恵質の破片で、裏面には正格子タタキ目を残す。なお、当寺院跡では鷺尾が出土しており、鬼瓦は金堂の降り棟端を飾ったものとして報告されている。

C 天平期創建寺院の鬼瓦

i 紀伊国分寺の鬼瓦（第4～7図）

紀伊国分寺は紀の川市東国分に所在する天平期創建の寺院である。

紀伊国分寺と先述の西国分廃寺は、江戸時代からどちらが僧寺か度々論争されてきたが、昭和 13 年の『国分寺の研究』に伴う研究で、論争は基本的に決着した。昭和 47 年には和歌山県教育委員会が基礎調査を開始、翌昭和 48 年度から 50 年度にかけて伽藍を構成する主要な建物を確認する発掘調査が行われた。現在では紀の川市東国分にある寺院跡が紀伊国分寺であることが確定している。

紀伊国分寺では、和歌山県教育委員会が昭和 47 年度に基礎調査、昭和 48 ~ 50 年度にかけて金堂・塔・僧坊を中心に伽藍全域の確認調査を行った（藤井 1979）。その結果、紀伊国分寺の寺域は方二町で、西から 270 尺（約 90 m）の南北中軸線上に南門と中門・金堂・講堂・軒廊・僧坊を一直線に配し、中門から講堂にかけてめぐる廻廊内の金堂東寄り前方に塔を配置する大官大寺式の伽藍が確認された。創建期の紀伊国分寺は平安時代に焼失し、再建されたことも確認された。

また、昭和48年度の調査と昭和63年度の調査により、講堂基壇上に建っていた本堂の移築が行われた。関連する調査により、紀伊国分寺が創建時から現在まで度重なる再建を経て現在まで法灯を伝えた状況が確認された（菅原1992）。

紀伊国分寺では、これまで発掘調査報告書で計11点の鬼瓦片が報告されているが、今回は改めて紀の川市歴史民俗資料館等で計24点分の資料を実見した。これらは南都七大寺式の鬼面文鬼瓦であり、大型・中型・小型の三種類（1～3）にまとめられる。

鬼瓦1は南都七大寺式鬼面文鬼瓦の大型品で3個体分が出土し、縦約51cm、横45cm、厚さは約8cm（最大厚17cm）の製品である。全体はやや縦長の蒲鉾形で、下部中央の抉りはやや浅い。鬼面文は全体として、写実的かつ立体的に表現される。大きい団栗眼と突出した獅子鼻をもち、鼻稜線と眉は比較的細い凸線で表す。開いた口の上部には四角い切歯が4本、その脇に牙状の犬歯が2本表現され、口の下部は鬼瓦の抉り部にあたり表現されない。頬と額の凸部は半球形の粘土貼り付けで表現し、額と目尻は2本、頬と口の外側は1本のしわを突線で表現する。周縁に沿って低い外縁と2本の細い凸線をめぐらし、2本の凸線の間に珠文24個を配す。表面・側面・裏面はともに平滑で、全体的にナデにより仕上げられている。胎土は密だが1cm以下の角の取れた石を少量含み、焼成はやや甘く、やや褐色味を帯びた灰白色を呈す。

1-1は目の周辺と口の周辺の破片で、金堂基壇北側外と講堂基壇北東部外で出土した。1-2は鼻から口にかけての大型の破片で講堂跡から出土した。1-3はほぼ全体形の分かる3片の接合する個体で、かつての住職が掘り出したものであるという。紀の川市歴史民俗資料館に常設展示されており、今回、紀の川市の協力を得て資料化した。

鬼瓦2は南都七大寺式鬼面文鬼瓦の中型品で、9点4個体分を実見した。細かい破片となっているが、縦約45cm、横約42cmに復元されている（図6）。やや縦に長い蒲鉾形で、下部中央の抉りはやや浅いものが確認できる。厚さは平坦部で4.3～5.0cm、残存する突出部で7.3cm。文様構成は大型品と同様であるが、写実的な立体感はなく、全体として簡略化が進み、平坦面に粘土を貼り付けたような凹凸表現が多い。目の外側は2本の凸線により目尻があがったような表現となる。歯は細長くなり、牙や口の側面の表現も細長い歯と同様の表現に変わる。珠文は隅丸方形状で大きく、16個分が配されている。胎土は細かい砂粒を多量に含み、焼成は堅緻。側面はケズリ、裏面は幅5cm程度の板ないしハケ状工具による縦方向のやや乱雑な調整がみられる。

2には縁のあるもの（2-1・2-3・2-5・2-6）と縁を切り落としたもの（2-4）がある。2-2・2-3・2-5・2-8は僧坊跡整地層から出土した。また、2-7は講堂基壇正面端から出土した。火災を受けた跡が確認できる資料も含まれている。

鬼瓦3は南都七大寺式鬼面文鬼瓦の小型品である。残存する資料から最大サイズは縦39cm、幅35cmと復元されるが、外縁を削り落とした資料と、両裾部を打ち欠いた資料がそれぞれ全体の約半数ずつ確認される。3-1は外側の縁を焼成前に切り落としたもので

縦 36cm、横 31cm、3-2 は焼成後に裾を打ち欠いた資料で縦 32cm、横 35cm である。全体形はやや縦に長い蒲鉾形で、本来は 3-1 のように下部中央の抉りは深く、裾部は平坦に作られる。厚さは 5 ~ 6 cm、目や鼻部で厚さ 8 cm。鬼面文の文様構成は大型・中型と同様であるが簡略化が進み、目や鼻、額、頬は半球形になり、目尻はオタマジャクシのしっぽのように伸びた表現となる。歯は表現しなくなり、口の表現に沿って、口周りのしわの表現がカーブを描くようになる。珠文帯には 13 個の珠文を飾るが、裾部には珠文を配していない。外縁と珠文の間の凸線が幅広に作られている。これらのことから、焼成前の縁の削り落としと、焼成後の裾部打ち欠きを考慮に入れて作られた範型を使用していることが分かる。胎土には細かい砂粒を多量に含み、焼成は堅緻。側面は 7 ~ 8 cm ごとの面取り状のケズリ・板おさえ痕、裏面は幅 5 cm 程度の板ないしハケ状工具による縦方向のやや乱雑な調整、抉り部には強めのナデ調整が観察される。

3 の破片は 11 点確認し、外縁のあるもの 5 点、外縁を削り落としたもの 4 点、不明 2 点である。3-1 は講堂基壇南西部南側整地層から、3-2 は講堂基壇正面端から出土した。

なお、紀伊国分寺の鬼瓦は大型品の 1 が 3 個体、中型品の 2 が 4 個体以上（破片 9 点以上）、小型品の 3 は 6 個体以上（破片 11 点以上）出土しており、金堂・講堂の大棟で 1、降棟で 2、隅棟に相当する位置で 3 が使用された可能性が高い。3 は抉りの深さの浅いものと深いものが半数ずつ出土しており、抉りの深い 3-2 は金堂の稚児鬼、小型で抉りの深い 3-1 は講堂の二の鬼瓦となる可能性も考えておく必要があるだろう。

紀伊国分寺の瓦では、1 ~ 3 のほかに写真 4 のような瓦片があり、古代の鬼瓦片の可能性も考えられる。抉り部に接して四角い歯を 2 本表現し、鼻に相当する部分は剥離、頬か牙に相当する部分が突出する破片で、講堂跡で出土している。

D 和歌山県の鬼瓦製作の背景等について

和歌山県内では、西国分廃寺で 1 種類、佐野廃寺で 1 種類、紀伊国分寺で 3 種類の古代の鬼瓦が確認された。それぞれの鬼瓦は文様・年代の異なるものであるが、製作の背景について簡単に説明しておく。

西国分廃寺の創建軒瓦は坂田寺式であり、その後、面違複線鋸歯文縁をもつ上野廃寺式軒丸瓦（川原寺式亜式）の複弁八弁蓮華文軒丸瓦、本薬師寺式単弁八弁蓮華文軒丸瓦、複層蓮華文軒丸瓦があり、その他独特な文様の軒丸瓦も創作されている。軒平瓦は三重弧文、上野廃寺で出土する統一新羅系、興福寺式等の軒平瓦等が出土しているが、軒丸瓦に比べて 5 分の 1 ほどの数しか出土しておらず、創建当初は軒平瓦を使用していなかった可能性が高い。西国分廃寺は一説には坂田寺式軒丸瓦で最も古い寺院とも考えられている寺院で、創建年代は 640 年頃と推測される（丹野 2014）。また、西国分廃寺では鷗尾片 3 点のほか、蕨手文をあしらった上野廃寺と共に通する隅木蓋瓦片が出土している。この上野廃寺と周辺

にある山口廃寺・直川廃寺は和歌山市北東部にあり、『日本国現報善惡靈異記』で渡来系氏族の三間名干岐が壇越として登場する「能応寺」の候補とされる寺である。紀伊で最も古い素弁蓮華文軒丸瓦が複数表採されている山口廃寺では、須恵器風のタタキをもつ瓦が多数確認できるので、この付近では渡来系の技術者集団と須恵器工人を再編した可能性もあり、西国分廃寺の鬼瓦を生産した候補地に挙げられる。

佐野寺の創建軒瓦は川原寺式亜式の蓮華文軒丸瓦で、蓮弁は7弁複弁、外縁には凸鋸齒文をめぐらす。その後、幾何学文のような蓮華文軒丸瓦、本薬師寺式の複弁八弁蓮華文軒丸瓦、巨勢寺式の纖細な隆線を用いた軒丸瓦が使用される。佐野寺の軒瓦は大和南部の川原寺・朝妻廃寺・巨勢寺の瓦の文様と生産体制の影響が認められ、畿内南限に位置する寺院として、天武持統朝の時期に中央からの助力が行われたことが認識できる。佐野寺では道具瓦の可能性のある用途不明な須恵器がいくつか出土しており、鬼瓦1もタタキ技法を用いて薄くつくられた須恵質製品であることから、中央からの助力のもと須恵器工人が再編されて鬼瓦生産が行われた背景も考えられる。

これらのことから、7世紀中頃創建の西国分廃寺では、在地・渡来系等の檀越と須恵器工人の再編、7世紀後葉創建の佐野廃寺では中央からの助力と須恵器工人の再編によって鬼瓦が作成された可能性が考えられる。

紀伊国分寺は天平期創建の古代寺院であり、創建軒瓦は興福寺式である。紀伊国分寺から約2.5km東に所在する大規模な官衙遺跡である栗島遺跡では瓦窯もみつかっており、窯の近くでは埴が出土している。遺跡では坂田寺式のほか、平城京6316G型式軒丸瓦と6710A型式軒平瓦のセットを模倣した軒瓦も出土しており、紀伊国分寺から栗島遺跡にかけての一帯が紀伊国分寺の鬼瓦の生産地の候補地の一つといえるだろう。

(和歌山県立紀伊風土記の丘)

参考文献

- 菅原正明 1992 「第3章史跡紀伊国分寺跡講堂の発掘調査第2節出土遺物」『史跡紀伊国分寺跡保存整備事業報告書』財団法人和歌山県文化財センター
- 丹野 拓 2014 「紀伊における飛鳥・白鳳期の軒瓦の系譜と地域性」『考古学研究』第61卷第1号
- 藤井保夫 1979 「(2) 道具瓦及び埴」(Ⅱ紀伊国分寺跡、第2章 発掘調査の成果、第5節 遺物)『紀伊国分寺－紀伊国分寺跡・西国分廃寺跡の調査－』和歌山県教育委員会
- 藤井保夫 1979 「(3) 道具瓦」(Ⅲ西国分廃寺、第2章 発掘調査の成果、第3節 遺物)『紀伊国分寺－紀伊国分寺跡・西国分廃寺跡の調査－』和歌山県教育委員会
- 藤井保夫 2016 「(へ) 鬼瓦」(第Ⅱ部 佐野廃寺の発掘調査、2 佐野廃寺の遺構と遺物、(4) 遺物、口屋瓦)『－和歌山県伊都郡かつらぎ町佐野所在－佐野廃寺の研究』佐野廃寺の研究刊行会

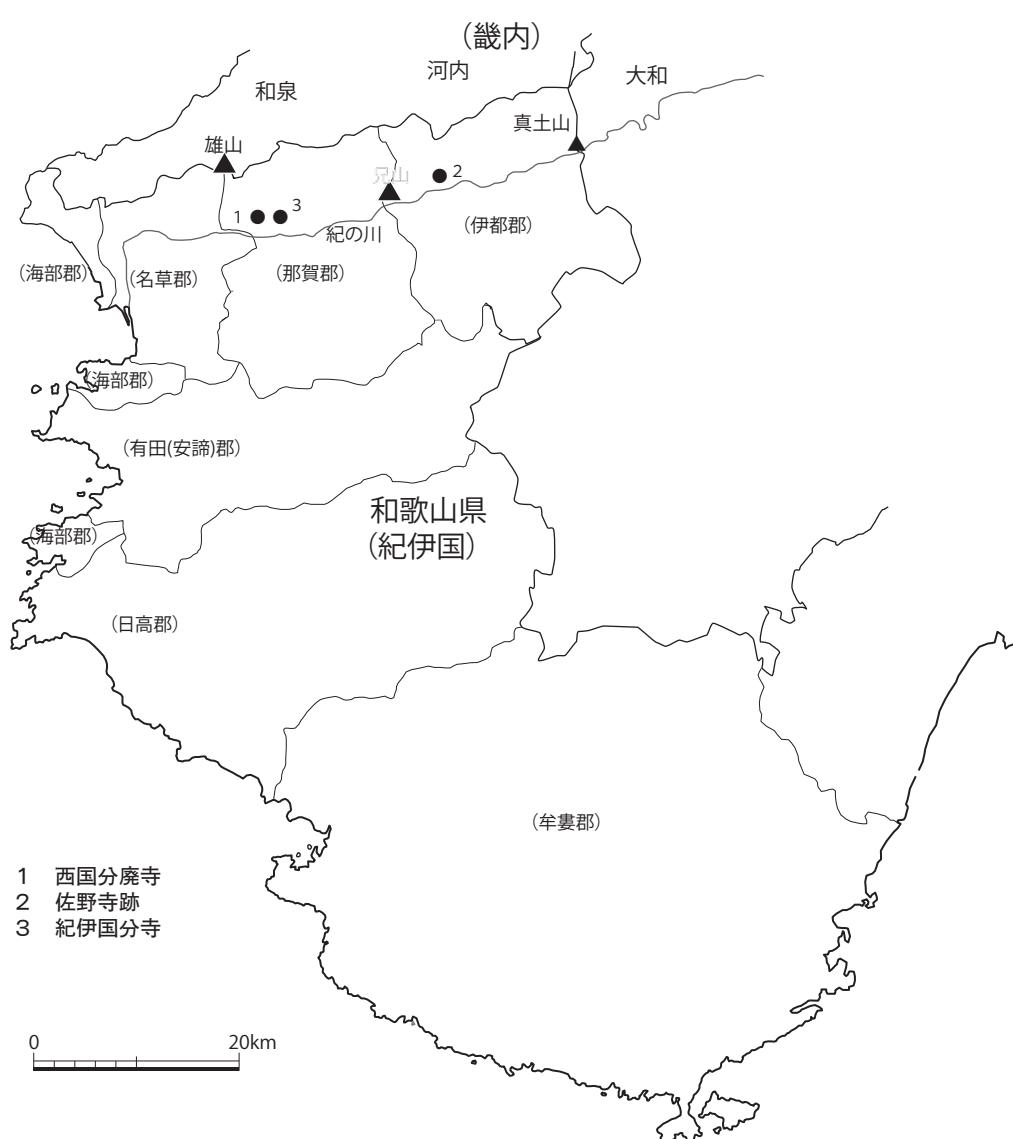
図版出典

- 第1図：筆者作成。
- 第2図：藤井 1979。
- 第3図：藤井 2016。
- 第4図1-1：藤井 1979。1-2：菅原 1992を参照。1-3：筆者作成。

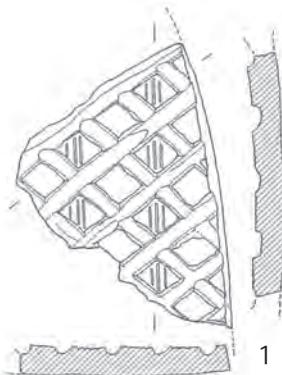
第5図 2-1～2-4：藤井 1979。2-5：菅原 1992 を参照。復元模式図は藤井保夫氏提供。

第6図 3-1：藤井 1979。3-2：菅原 1992。

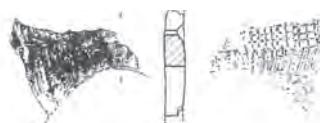
参照写真：筆者撮影。



第1図 和歌山県（紀伊）の鬼瓦出土地



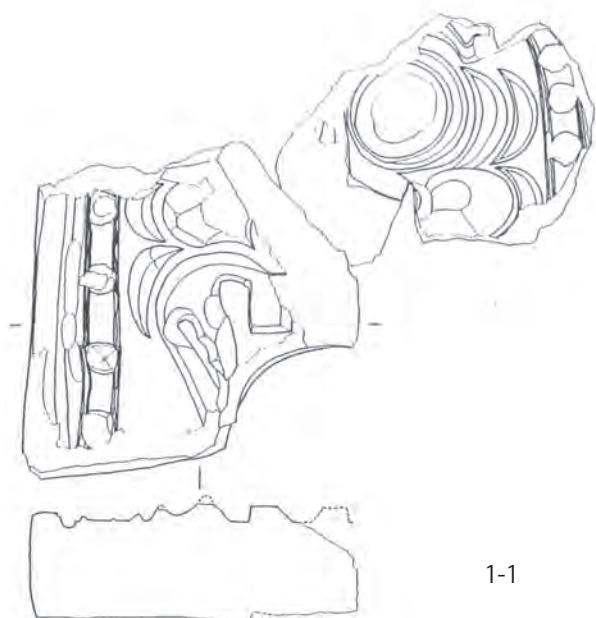
第2図 西国分廃寺鬼瓦 (1:6)



第3図 佐野寺跡鬼瓦 (1:6)



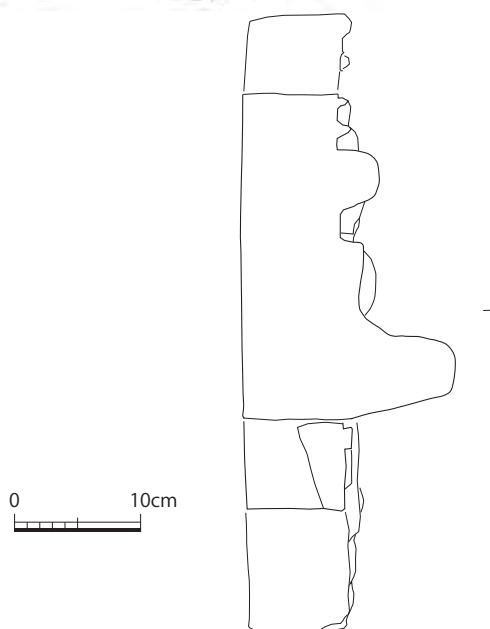
1-2



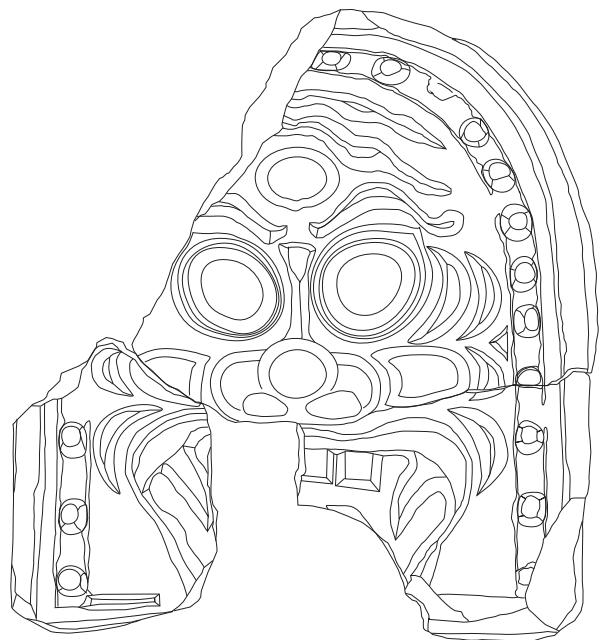
1-1



1-3

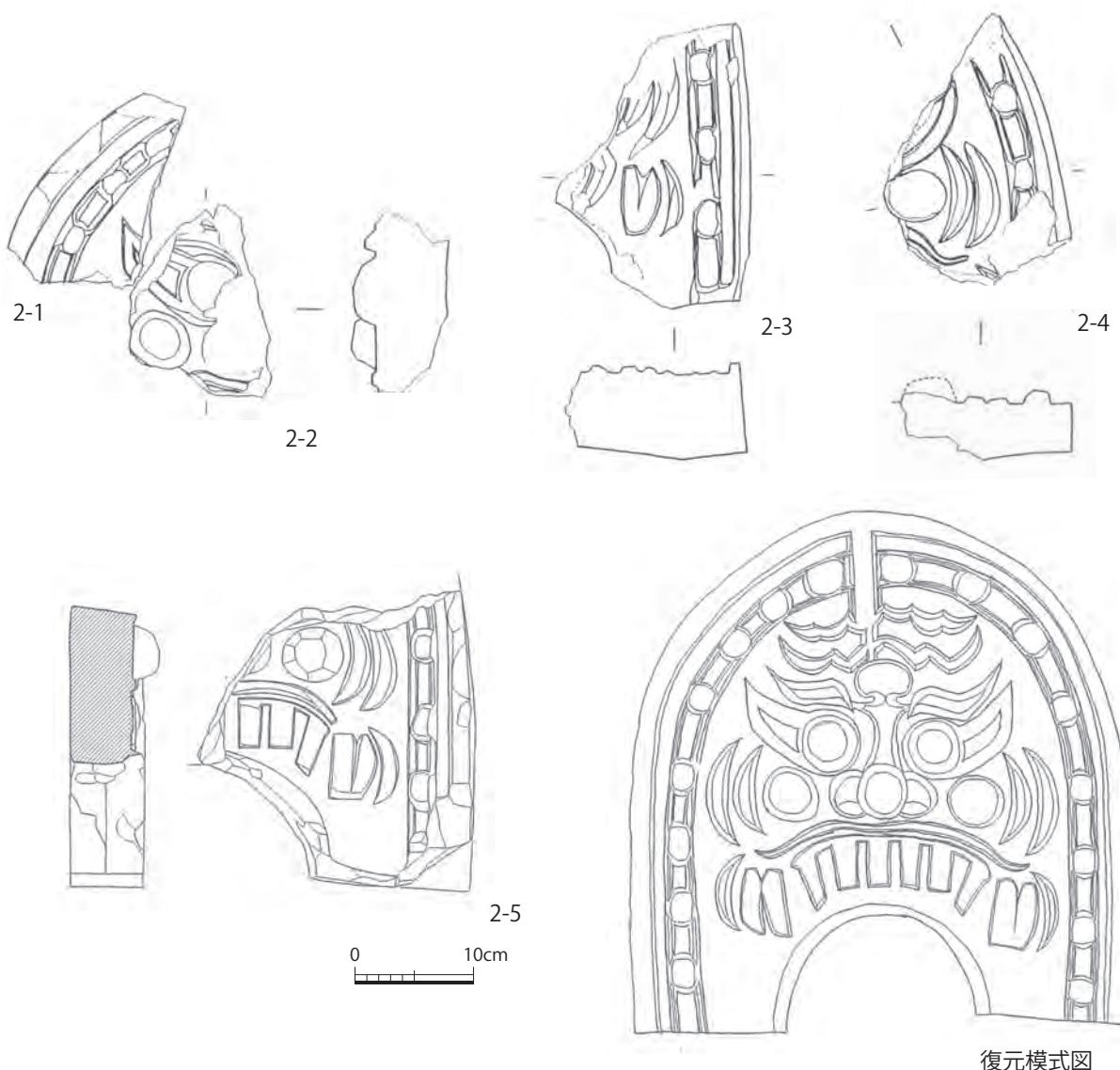


0 10cm

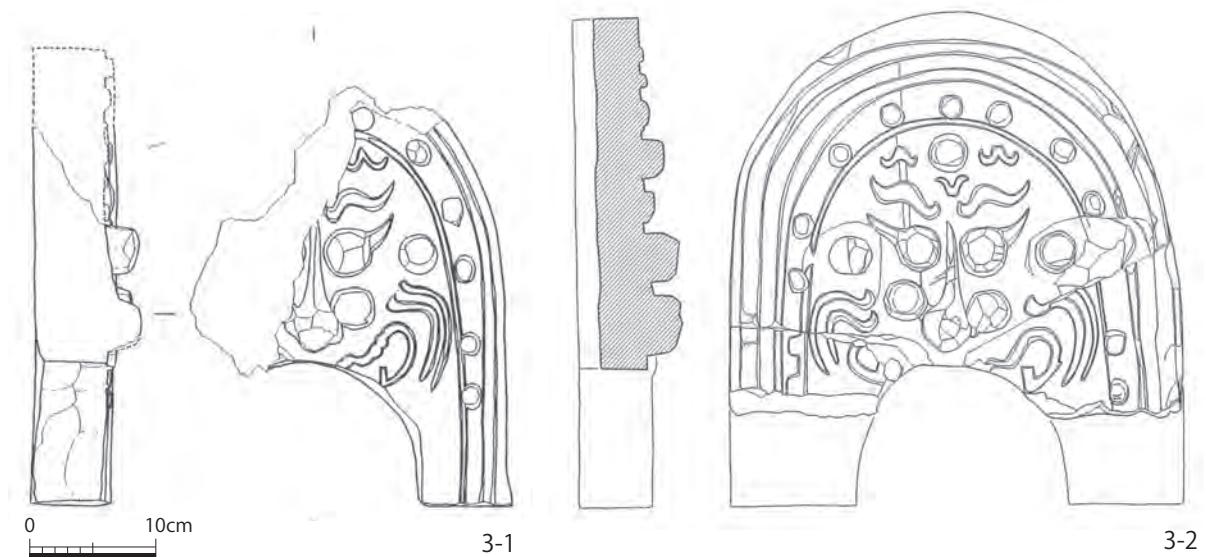


1-3

第4図 紀伊国分寺鬼瓦 1 実測図 (1:6)



第5図 紀伊国分寺鬼瓦2 (1:6)



第6図 紀伊国分寺鬼瓦3 (1:6)



第7図 紀伊国分寺鬼瓦小片 (参考)